

# 政治的リーダーシップ分析における 資質論的アプローチ

—理論的研究のための概念的枠組—

A Framework of Trait Approach for Analysis of Political Leadership

—The Concepts for Theoretical Studies—

石井 貫太郎  
(Ishii Kantaro)

## Abstract :

The aim of this article is to construct the theory of political leadership by trait approaches of natural elements. Traditionally, there are two kinds of methods of analyzing the leadership if it says generally. First, it is a method of paying attention to leader's nature, and a method of paying attention to the leader's behavior in second. It is thought that the former is chiefly study results of the historical science and politics, and the essence of the leadership is leader's natures. It is thought that the latter is chiefly study results of psychology and business administration, and that the essence of the leadership is the leader's behavior and elements of his environment.

The research of both parties has developed independently up to now. Therefore, recognition only that the essence of leadership is either the nature or the action exists in the assumption. It is a mutually exclusive dichotomy discussion.

However, the feature of the behavior of a certain person depends on person in question's character. Especially, a human element greatly influences political leadership. Because it is an exercise of public power, and the influence is immediate. Therefore, when political leadership is researched, it is necessary to integrate the trait theory and the behavior theory. And, it is consolidated in the research of the nature after all.

**キーワード** : リーダーシップ、政治的リーダーシップ、資質論的アプローチ、政治学、  
国際政治学

**Key Word** : Leadership, Political Leadership, Trait Approaches, Political Science,  
International Politics

## <目次>

- 1、問題の所在
  - (1) はじめに
  - (2) リアリズムとの対話
- 2、自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップの三タイプ
  - (1) 第一次的要素と第二次的要素
  - (2) 自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップのタイプの特特定化
  - (3) 政治的リーダーシップの三タイプとその連携関係
- 3、自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップの五タイプ
  - (1) 自我状態の機能モデルの意義
  - (2) 自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップのタイプの特特定化
  - (3) 政治的リーダーシップの五タイプとその連携関係
- 4、結論
  - (1) 要約
  - (2) 課題

### 1、問題の所在

#### (1) はじめに

一般に、リーダーシップ (leadership) を分析する視角には、当該リーダーの資質に着目する「資質論的アプローチ (Trait Approach)」と、当該リーダーの行動に着目する「行動論的アプローチ (Behavioral Science Approach)」の二種類がある<sup>(1)</sup>。前者は、主として歴史学や政治学の分野で蓄積されてきた研究の成果であり、リーダーシップの本質が当該リーダーの人的資質にあると考える議論である。また後者は、主として心理学や経営学の分野で蓄積されてきた研究の成果であり、リーダーシップの本質を、当該リーダーの行動やその行動を誘発する要因としての彼もしくは彼女を取り巻く環境的な要素に求める議論である<sup>(2)</sup>。

従来、双方の研究はそれぞれ独立して発展してきた。したがって、こうした研究動向の背景には、果たしてリーダーシップの本質は資質か行動のいずれか一方であるという二律背反的な

前提認識が存在していたと言える。

しかし、ある人物の行動の特徴とは、多分はその人物の性格 (characteristics) を中心とした資質 (trait) に規定されるものである。特に、政治的リーダーのリーダーシップを論ずる際には、それが当該リーダーの統治下にある人々に対するより公式な権力を行使する活動であり、その影響がより直接的に被支配者の生殺与奪に関わる活動であるため、当該リーダーの人的要素が多分に大きく影響する<sup>(3)</sup>。

したがって、政治的リーダーシップの本質を論ずる研究は、従来の資質論的アプローチと行動論的アプローチの双方を統合する方向で展開されるべきであり、なかんずくそれは、当該リーダーの資質的要素の是非を分析する研究に帰着するものであると考えられる。

以上のような問題意識を前提として、本稿では、第一に、精神分析 (Psychoanalysis) や社会心理学 (Social Psychology) の分野で開発された「交流分析: TA (Transactional Analysis)」の手法である「エゴグラム (Egogram)」を構成する二つのモデル (「自我状態の構造モデル (Structural Model in Ego States)」および「自我状態の機能モデル (Functional Model in Ego States)」) を用いて政治的リーダーシップのタイプ (type) を理論的に研究するための諸概念の整理を試行する<sup>(4)</sup>。なお、筆者はこうした研究をマイクロ国際政治理論における「政策決定者」に関する議論の一つの研究領域として位置付けていることを付言しておく。

#### (2) リアリズムとの対話

ところで、「リアリズムとの対話 (A Dialogue to Realism or Conversation with Realism)」という知的活動は、我々人間が日常の社会生活において頻繁に行う思考過程の中核に位置する行動原理である。これは、我々が何らかの行動を選択する際に、その行動を制約すると考えられる様々な情報に照らし合わせて、その実現可能性を思索する活動である。現状認識や実現可能性といった我々の知的模索に関する諸要素の判定基準は、ほとんどもっぱらこの原理に置かれていると言って良い。

しかし、まずもって人間が自己の夢や希望を抱く過程の当初においては、この対話は自由奔放な発想の可能性を呪縛し、より現実的な判定や結論へと我々の思考を導いていく傾向を生む。したがって、問題は、この対話をどの程度の時空に限定するか、その按配に対処する判別の如何である。こうした対話をあまりにも過度に怠れば、夢は現実性を欠落させた単なる幻想となり、逆に、必要以上にこの対話に引きずられれば、希望は現実によって摩滅化され、魅力を喪失した情念に墮落してしまう。

ところで、国家のリーダーたる政治的リーダーは、どちらかと言えばこの対話が過度にならないように注意しなければならない職掌にあり、これに対して、官僚や経営者などの他の組織のリーダーたちは、この対話が不足しないように常に留意する必要を有する職責にある。最も重要な認識すべき事項は、この両者がまったく方向の異なるベクトルとの対決を運命づけられている職掌にあるという事実であり、両者が根本的に異なる性格を求められている職業であるという認識である。

すなわち、政治家としての資質を有すべき立場の人間は、この点に関する限りにおいては、官僚や経営者とは正反対の性質を有すべき者であり、また逆に、官僚や経営者としての資質に長けるべき立場の者は、政治家には向かない種類の性質を有する人間ということになる。この事実は、国家のリーダーとしての政治的リーダーと、経営者や官僚などの他の組織のリーダーとの決定的な相違を明確かつ論理的な形で表現しているとともに、我々が政治的リーダーにふさわしい資質を考察する際に、当該人物の性格をはじめとする人間的要素を分析する必要性を訴えているといえる。

たとえば、現代日本のように、政治家が政党政治家と官僚政治家のいずれであるのかを判別することが事実上困難になっている状況下であれば、その必要性はさらに増大する。日本の政治家には、官僚経験を経て政治家になった官僚政治家と、生粋の政党人として政治家の道を行ってきた政党政治家の二種類があると考えられているが、しかし、世襲化が浸透した結果、現

代日本の政治家には、両者の区別が困難な現職が飛躍的に増加した。いわゆる二世三世の議員であると同時に、官僚や経営者の出身であるという人々の登場である。

元来、歴史的かつ地理的な時空状況のいかんによって、この両者は適度なバランスをもって均衡していることが必要であった。なぜなら、前者は文字どおりの「政治」的な資質の体现者として、どちらかと言えば国家や社会の枠組みの在り方それ自体の是非を問うスタンスからの活動や提案を行う革新的な存在であるのに対して、後者は逆に、「行政」的あるいは「経営」的な資質の体现者として、既存の組織や社会の枠組みを所与とした政策の是非を問うスタンスからのそれを行う保守的な存在だからである。ここに我々は、政治的リーダーの資質を分析する作業の重大性を認識することができる。

以上のような前提認識に基づき、以下、本稿では政治的リーダーの資質を分析するための理論的定式化を目指した諸概念の整理を試行する。

## 2、自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップの三タイプ

### (1) 第一次的要素と第二次的要素

ところで、政治的リーダーの資質を構成する要素には、当該リーダーが生まれながらに有している第一次的または先天的 (inherent or natural) な要素と、彼もしくは彼女が成長していく過程で獲得する第二次的または後天的 (acquired or posteriority) な要素の二種類があると考えられる<sup>(5)</sup>。前者は、政治的リーダーシップのタイプを特定化する要素であり、後者は、政治的リーダーのスキルを構成する要素である。

本稿では、これら二つの政治的リーダーの資質の中で、その第一次的要素について検討する。これは当該政治的リーダーが生まれながらに有する先天的な要素であるがゆえに、本人の努力によってなかなか変えることが困難なものであり、また、これによって当該政治的リーダーのリーダーシップのタイプが決定されることから、それが時代状況や環境の条件に適合性を有する政治的リーダーと成り得るか否かが判定できるという意味で、決定的に重要な要素である。

## (2) 自我状態の構造モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定位

ところで、政治的リーダーは、この第一次的要素の種類により、「創造型リーダー (Creative Leader)」、「管理型リーダー (Administrative or Managerial Leader)」、「象徴型リーダー (Symbolical Leader)」の三つのタイプに分類することができる<sup>(6)</sup>。ここで、創造型リーダーとは、新規の制度開発や国家社会の建設に自己の能力を発揮するタイプである。また、管理型リーダーとは、既存の制度運用や国家社会の効率的運営に自己の能力を発揮するタイプである。さらに、象徴型リーダーとは、確固とした基盤を有する成熟した国家や社会において、伝統的な価値観や国民の忠誠心を確立する過程でその存在が効果を発揮するタイプである。

こうした政治的リーダーの三つのタイプは、精神分析や社会心理学における自我状態の構造モデルの概念で使われる「子ども (Child)」、「大人 (Adult)」、「親 (Parent)」という人間の三つの性格要素にそれぞれ該当すると考えられる<sup>(7)</sup>。なぜなら、創造性の要素とは、将来のある子どもが自己および他者に対して理想や夢を抱く感性と密接な関連を有するものだからであり、管理性の要素とは、成熟した大人が自己および他者ならびに周囲の環境を安定的かつ効率的に整備する感性と密接な関連を有するものだからであり、象徴性の要素とは、親が自己の保護下にある他者からの信頼の基盤として存在する感性と密接な関連を有するものだからである。したがって、当該政治的リーダーがいかなる種類のリーダーシップを発揮するタイプであるかは、エゴグラムによって判別することが可能である。

また、一人の人間がこれら三つの要素をさまざまな割合で組み合わせた人格を有するのと同様に、一人の政治的リーダーは、こうした三つの要素をさまざまな割合で組み合わせた性格を同時的に合わせ持っている。ただし、それぞれのタイプの政治的リーダーは、他のタイプの要素をも同時に合わせ持つが、自己のタイプの要素をとりわけ最も多く持っていると考えるのが素直であろう (図表1参照)。

## (3) 政治的リーダーシップの三タイプとその連携関係

なお、これら三つの政治的リーダーのタイプは、あくまでもそれぞれの政治的リーダーの資質を類型化したものであり、決してその優劣を意味する概念ではない。また、どのタイプの政治的リーダーが当該政治的リーダーにふさわしいかは、当該国家や当該社会が置かれている時代状況や国際関係などの環境的要素に依存する。そのような環境と合わないタイプのリーダーが輩出すると、当該国家や当該社会に適性のない政治的リーダーシップの歪みに由来する様々な弊害が噴出する<sup>(8)</sup>。

また、創造型リーダーが国家や社会の建設や新しい制度を設立することに適性を有するタイプであるのに対して、管理型リーダーや象徴型リーダーは、創造型リーダーによって作られた制度的枠組みをより効率のかつ安定的に運営することに適性を有するタイプである。したがって、これらの三つの政治的リーダーのタイプは、国家や社会の発展段階としての建設期 (または再構築期)、発展期、成熟期にそれぞれ適性を持った政治的リーダーの種類であり、したがって、それが連携する順序は、創造型、管理型、象徴型の順であることが望ましいといえる (図表2参照)。

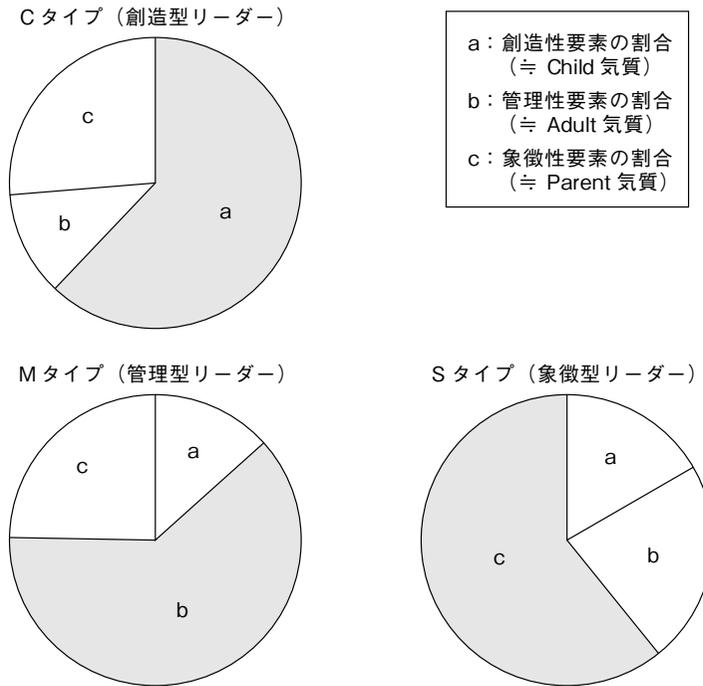
なお、いわゆる「複合的相互依存 (Complex Interdependence)」が拡大・深化した状況にある今日の国際関係においては、国際情勢は覇権国の覇権体制 (hegemony) が盛衰するステージと関連している部分が多い<sup>(9)</sup>。したがって、ここでは国際情勢の推移を覇権国の覇権力盛衰の諸段階として表現している。

## 3、自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップの五タイプ

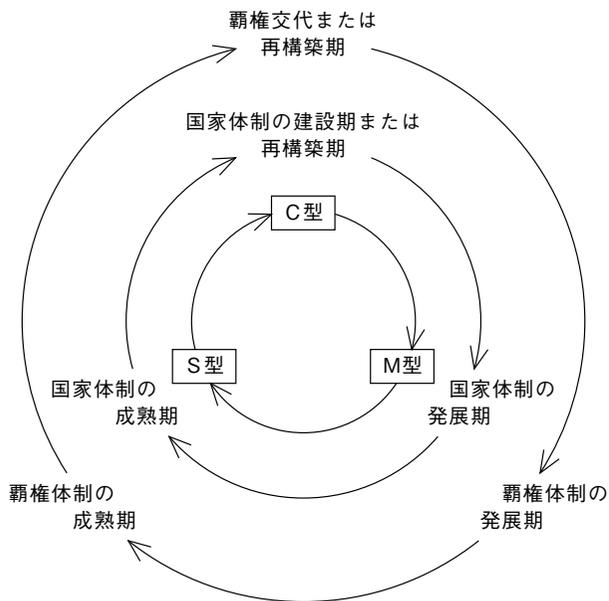
### (1) 自我状態の機能モデルの意義

さて、前節では自我状態の構造モデルによる政治的リーダーシップの類型化を試行したが、ここでは新たに、自我状態の機能モデルを用いてこれを改訂する<sup>(10)</sup>。自我状態の機能モデルでは、構造モデルにおいて各一つずつ設定されていた「子供」と「親」の要素がそれぞれ分化し、

図表 1：自我状態の構造モデルと政治的リーダーの三タイプ



図表 2：国際環境と国家の発展段階および政治的リーダーの三タイプの連携



構造モデルにおける三つの性格要素による分析に対して、より多く五つの性格要素によって分析する手法となっている。

まず、「自由な子供 (Free Child)」であり、これは子供が有する気質のうちで、特に自由闊達でエネルギー的な側面を念頭に置いた要素であり、本人の自主的かつ積極的な意志によって行動選択をする性格を表現している。次に、「従順な子供 (Adapted Child)」であり、これは子供が有する気質のうちで、特に親をはじめとする目上の者の言うことに素直に従う側面を念頭に置いた要素であり、他者からのアドバイスや指示を率直に受け入れる行動選択をする性格を表現している。また、「厳格な親 (Critical Parent)」であり、これは親が有する気質のうちで、特に子供や後輩などを厳しく指導する父親的な側面を念頭に置いた要素であり、厳格で頼りがいのある男性的な行動選択をする性格を表現している。さらに、「寛容な親 (Nurturing Parent)」であり、これは親が有する気質のうちで、特に子供や後輩などを優しく手ほどきして保護する母親的な側面を念頭に置いた要素であり、寛容で世話好きな女性的な行動選択する性格を表現している。最後に、大人 (Adult) は従来型と同様に一つの設定である。

## (2) 自我状態の機能モデルと政治的リーダーシップのタイプの特定化

次に、以上のような自我状態の機能モデルに示された五つの性格要素を、政治的リーダーの資質を構成する諸要素に置き換えて翻訳すると、以下のようになると考えられる。

### ① 「自由な創造型リーダー (Free Creative Leader)」としての要素

国家が構造的な改革や新しい制度の創設などを遂行していく際の政治的リーダーには、この要素の値が高いことは必須条件である。創成期の政治的リーダーに最も必要な将来的ビジョンを生み出す力を多く有しているからである。しかし、度を越せば理想論ばかりを唱え、国民を景気の良いお祭り騒ぎにばかり扇動しつつ、うまくいかないときすべてを放り出す無責任なリーダーとなる可能性がある。

### ② 「素直な創造型リーダー (Obedient Creative Leader)」としての要素

政治的リーダーにとって最も必要不可欠な要素がこれであり、他者からの異なる意見や批判に耳を傾ける融通性と、納得すればそれを受容する素直さを有しているからである。したがって、主として民主主義的な政治過程が実現されている政治体制においては、この値が高いことは政治的リーダーの重要な要件であると考えられる。しかし、度を越せば他者の異論に右往左往して優柔不断となり、政治の混乱を招くリーダーとなる可能性がある。

### ③ 「管理型リーダー (Managerial Leader)」としての要素

この要素が高いことは、すでに出来あがっている体制を維持していく役割を担う政治的リーダーとしては最も有能である。しかし、その反面、本人が有能かつ冷徹で合理的な判断を下せる能力や性格を有しているため、度が過ぎれば他者への思いやりや弱者に対する愛情が不足したリーダーとなる可能性がある。したがって、創造性のある仕事には比較的向きであり、むしろリーダーの補佐役としての立場が似合うタイプである。政治的リーダーよりも、むしろ官僚・役人に適したタイプとしての要素が大きいと言える。

### ④ 「厳格な象徴型リーダー (Critical Symbolic Leader)」としての要素

この要素が高い値であることは、人々を引っ張っていく立場にある政治的リーダーにとってはいかなる環境においても必要である。規律と秩序を重んじる心情は、政治的リーダーが有すべき倫理性の精神を構成する要素だからである。しかし、度が過ぎれば独裁的なリーダーシップを発揮し、警察国家化を招くタイプに変容する可能性がある。

### ⑤ 「寛容な象徴型リーダー (Nurturing Symbolic Leader)」としての要素

この要素が高い値であることは、政治的リーダーにとっていかなる環境においても必要ではある。寛容と慈悲の心情は、政治的リーダーが有すべき博愛の精神を構成する要素だからである。しかし、度を越せば弱者・貧者の救済・福

社にばかり気を取られ、国家の舵取りにとって重要な現実主義的な外交や安全保障への気配りをおろそかにするリーダーとなる可能性がある。

言うまでもなく、先ほどの自我状態の構造モデルの場合と同様にして、一人の人間がこれら五つの要素をさまざまな割合で組み合わせた人格を有するのと同様にして、一人の政治的リーダーは、こうした五つの要素をさまざまな割合で組み合わせた性格を同時に合わせ持っている。また、それぞれのタイプの政治的リーダー

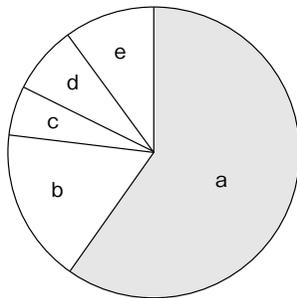
は、他のタイプの要素をも同時に合わせ持つが、自己のタイプの要素をとりわけ最も多く持っているといえる（図表3参照）。

### (3) 政治的リーダーシップの五タイプとその連携関係

なお、先に自我状態の構造モデルに基づく三つのタイプによって遂行した場合と同様にして、ここでこれら五つの政治的リーダーのタイプを用いて、その望ましい連携関係を図式化する

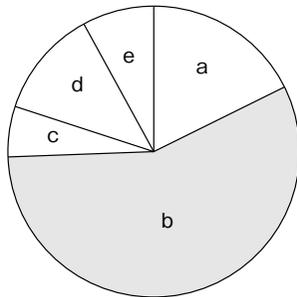
図表3：自我状態の機能モデルと政治的リーダーの五タイプ

FCタイプ（自由な創造型リーダー）

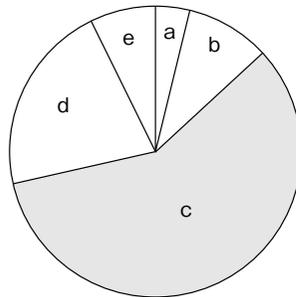


- a：自由な創造性要素の割合（≒ Free Child 気質）
- b：素直な創造性要素の割合（≒ Adopted Child 気質）
- c：管理性要素の割合（≒ Adult 気質）
- d：厳格な象徴性要素の割合（≒ Critical Parent 気質）
- e：寛容な象徴性要素の割合（≒ Nurturing Parent 気質）

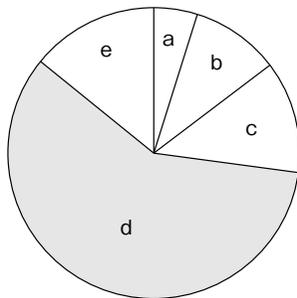
ACタイプ（素直な創造型リーダー）



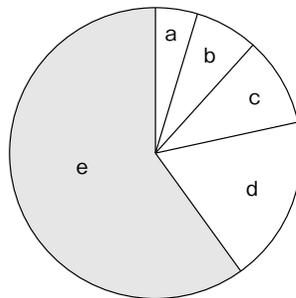
Mタイプ（管理型リーダー）



CS型（厳格な象徴型リーダー）



NSタイプ（寛容な象徴型リーダー）



ると以下ようになる。基本的には先ほどの図と同様であるが、言うまでもなく創造型と象徴型のリーダーが果たすべき役割の期間がそれぞれ詳細化している。また、今回も先ほどと同様にして、国際情勢の推移を覇権国の覇権力盛衰の諸段階として表現している。

ここでは、「素直な創造型リーダー」というものが「自由な創造型リーダー」と「管理型リーダー」との間の中継ぎ役として、また、「厳格な象徴型リーダー」というものが「管理型リーダー」と「寛容な象徴型リーダー」との間の中継ぎ役として、それぞれ有効かつ旺盛なる能力を発揮するタイプの政治的リーダーであることを示していると解釈できる<sup>(11)</sup>。

4、結論

(1) 要約

本稿の議論の要約は以下である。

- ①政治的リーダーシップの研究は、資質論的アプローチと行動論的アプローチを統合する方向でなされる必要があり、なかんずく、それは人間行動の源泉であるところの資質分析に帰着する。
- ②政治的リーダーの資質には、当該リーダーが

第一次的（先天的）に有する要素と、第二次的（後天的）に獲得する要素の二つの種類がある。

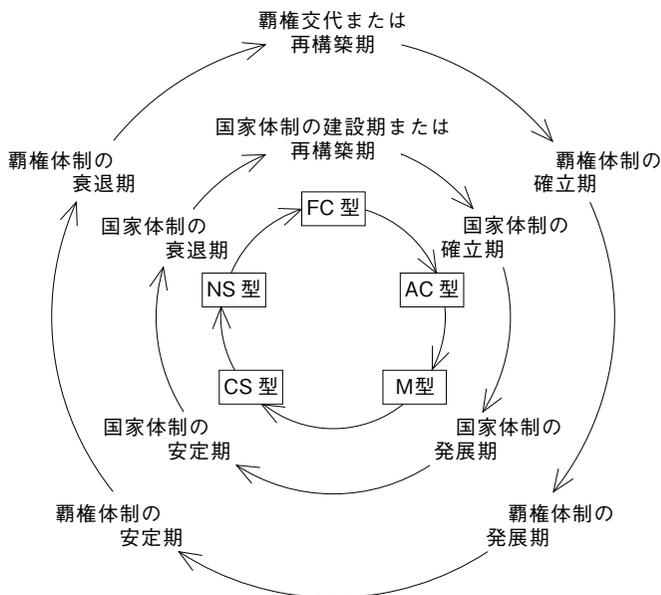
- ③第一次的要素について、自我状態の構造モデルの考え方に基づけば、政治的リーダーには、創造型、管理型、象徴型の三つの種類があり、どのタイプがリーダーにふさわしいかどうかは当該リーダーを取り巻く環境がいかなる状況にあるかに依存する。
- ④自我状態の機能モデルの考え方を加味すると、政治的リーダーの種類は、自由な創造型、素直な創造型、管理型、厳格な小腸型、寛容な象徴型の五つに類型化が可能であり、その連携の順序はやはり当該リーダーを取り巻く環境に依存する。

(2) 課題

本稿の議論には、以下の課題がある。

- ①リーダーの資質を構成する各要素の取捨選択とその内容を検討すること。
- ②リーダーの資質を構成する各要素の数量化を試行すること。
- ③リーダーの資質を構成する各要素間の相互作用と重複効果（いわゆる統計学でいう多重共

図表4：国際環境と国家の発展段階および政治的リーダーの五タイプの連携



線性問題)を検討すること<sup>(12)</sup>。

すでに指摘したように、いかなる人物が政治的リーダーにふさわしい資質であるかどうかという課題への対処の有効性は、当該リーダーを取り巻く環境がいかなる状況にあるのかに依存している。したがって、ふさわしい資質の人物を政治的リーダーとして選ぶためには、当該国家や社会に関するより正確な現状分析と将来展望が必要である。その意味で、「政治的リーダーシップの理論」が積極的な意義を持つかひなは、政治学の他の領域の研究動向にとどまらず、より広く法学、社会学、経済学、歴史学などの他分野の研究成果に依存している。

#### 【後注】

- (1) 資質論的アプローチは、元来は歴史上の偉大な政治家や皇帝などの統治者を研究することから始まっているため、別名で「偉人理論 (Great-Man Theory)」とも呼ばれている。たとえば、歴史的名著ともいべきN・マキアヴェッリ (河島英昭訳)『君主論』(岩波書店、1998年)などは、あまりにも有名である。
- (2) 資質論的アプローチの代表的な業績として、岡義武『近代日本の政治家』(岩波現代文庫、2001年)、塚田富治『近代イギリス政治家列伝：彼らは我らの同時代人』(みずほ書房、2001年)、田尾雅夫『組織の心理学 (新版)』(有斐閣ブックス、1999年)、石井貫太郎 (編)『開発途上国の政治的リーダーたち』(ミネルヴァ書房、2005年)、石井貫太郎 (編)『現代世界の女性リーダーたち』(ミネルヴァ書房、2008年)、J・S・ナイ・Jr. (北沢格訳)『リーダーパワー：21世紀型組織の主導者のために』(日本経済新聞社、2008年)、J. Blondel, *Political Leadership: Towards a General Analysis*, Sage Publishers, 1987, H. J. Elcock, *Political Leadership: New Horizon in Public Policy*, Edward Elgar Publishers, 2001, R. J. House and M. L. Baetz, "Leadership: Some Empirical Generations and New Research Directions", *Organizational Behavior*, No.1, 1979, pp.341-423, D. K. Simonton, *Why Presidents Succeed: A Political Psychology of Leadership*, Yale University Press, 1987などが挙げられる。また、行動論的アプローチの代表的な業績として、三隅不二『リーダーシップ行動の科学 (改訂版)』(有斐閣、1984年)、J. Misumi,

*The Behavioral Science of Leadership: An Interdisciplinary Japanese Research Program*, University of Michigan Press, 1985, R・R・ブレーク, J・S・ムートン (田中敏夫・小宮山澄子訳)『新・期待される管理者像』(産業能率大学出版部、1979年)、R. R. Blake, and J. S. Mouton, *The Managerial Grid*, Gulf Publish Co., 1994, R. R. Blake, and A. A. McCauley, *Leadership Dilemmas: Grid Solutions*, Taylor Wilson Publisher, 1991, C. L. Bovee, J. V. Thill, M. B. Wood and G. P. Dovel, *Management*, McGraw-Hill, 1993, P・H・ハーシー, K・H・ブランチャード (山本成二・水野基・成田攻訳)『行動科学の展開：人的資源の活用』(日本生産性本部、1978年)、P. H. Hersey and K. H. Blanchard, *Management of Organizational Behavior: Utilizing Human Resources*, Prentice-Hall, 1988, R・リッカート (三隅不二訳)『経営の行動科学』(ダイヤモンド社、1964年)、K・レヴィン (猪俣佐登留訳)『社会科学における場の理論』(誠信書房、1972年)、R. A. Johnson, R. J. Morsen, H. P. Knowles and B. O. Saxberg, *Systems and Society: An Introduction*, Goodyear Publishing, 1976, G. A. Yukl, *Leadership in Organizations*, Prentice-Hall, 1981などが挙げられる。特に、政治的リーダーシップの科学的分析については、河田潤一・荒木義修 (共編)『ハンドブック政治心理学』(北樹出版、2003年)、O・フェルドマン『政治心理学』(ミネルヴァ書房、2006年)、石井貫太郎『リーダーシップの政治学』(東信堂、2004年)などがある。特に、国際政治学のミクロ理論 (外交政策論)における数々の業績を遺した大御所の手によるG. D. Paige, *The Scientific Study of Political Leadership*, Free Press, 1977は、本稿の議論の先駆的業績ともいえる。なお、これらの業績のサーベイについては、石井 (2004) (前掲書) 第1章～第3章 (14～40頁)などに詳しい。

- (3) 国家のリーダーとしての政治家と、官僚や経営者などの他の組織のリーダーたちとの相違や差異に関する議論は、石井 (2004) (前掲書) 46～48頁を参照。
- (4) 交流分析やエゴグラムに関する議論の詳細については、「政治的リーダーの資質に関する政治心理学的アプローチ：エゴグラム分析の応用試論」『目白大学人文学研究』第5号 (85～99頁) 2009年所収を参照。同稿は、被験者としての対象自身の回答に頼らず、周囲の人間が客観的に被験

者を分析可能な手法の一例としての意義を持つ。また、エゴグラムの原典としては、いわゆる「交流分析 (TA: Transactional Analysis)」の開祖である E・バーン (南博訳) 『人生ゲーム入門 (新装版)』 (河出書房新社、1994年)、その弟子でエゴグラムの発明者である J・M・デュセイ (池見西次郎監修・新里里春訳) 『エゴグラム』 (創元社、1980年)、M・M・ゲールディング、R・L・ゲールディング (深見道子訳『自己実現への再決断』星和書店、1980年)、客観的分析手法としての質問紙法を開発した N. R. Heyer, "Development of a Questionnaire to Measure Ego States with Some Applications to Social and Comparative Psychiatry", *TAJ*, No.9, pp.9-19, 1979, N. R. Heyer, "Empirical Research on Ego State Theory", *TAJ*, No.11, pp.286-293, 1987, I・スチュアート、V・ジョーンズ (深見道子監訳) 『TA TODAY』 (実務教育出版、1991年)、岩井浩一・杉山薫「質問紙法エゴグラムの臨床的応用」『交流分析研究』第2巻1号 (3~13頁) 1993所収などがある。なお、我が国の企業において広くビジネスマンの心身健康管理に適用されたことで有名な東京大学医学部心療内科 (編) 『新版エゴグラム・パターン: TEG (東大式エゴグラム) 第2版による性格分析』 (金子書房、1993年) と東京大学医学部心療内科 (編) 『新版 TEG II : 解説とエゴグラム・パターン』 (金子書房、2006年) はあまりにも有名である。

(5) 後天的要素の拡充によって先天的要素が変化する可能性は、現代では微少であると考えられている。しかし、当該人物の行動を変化させることは可能であり、それゆえ資質論的アプローチは「特定の要素を有する人物のみがリーダーとなれる意義を論じた差別主義的な理論」であり、行動論的アプローチは「だれもがリーダーになれる可能性を論じた平等で夢のある理論」とのイメージが大衆民主主義の拡大と深化に伴って広く流布したが、これは本末転倒な認識である。なぜなら、行動が変わることと性格が変わることはまったくの別問題だからである。石井 (2004) (前掲書) 19頁参照。他に、G・ベッカー (佐野陽子訳) 『人的資本: 教育を中心とした理論的経験的分析』 (東洋経済新報社、1976年) など。

(6) 政治的リーダーを類型化する試みは多数試行されているが、そのほとんどが三類型であることはよく知られている。石井 (2004) (前掲書) 51~54頁参照。

(7) 交流分析の開祖であったバーンの弟子のデ

ュセイ (1980) などの議論が念頭に置かれている。

- (8) たとえば、国際環境や国家体制が発展期にある時は、既存の枠組みの効率性を向上させるために管理型リーダー (Mタイプ) がリーダーシップを執る適性があるが、この時に創造型リーダーや象徴型リーダーが登場すると、必要以上に国民の危機感を煽ったり (Cタイプ)、逆に、むやみに国民に安心感を与えてしまうなど (Sタイプ)、急進主義や楽観主義などの不適切な政策を施行する可能性がある。それは効率性を阻害し、当該国家の発展を蝕む結果を導出することになる。石井 (2004) (前掲書) の第6章 (65~86頁) で遂行されている事例研究を見よ。
- (9) マクロ国際政治理論の覇権安定論に関する詳細については、石井貴太郎『現代国際政治理論 (増補改訂版)』 (ミネルヴァ書房、2003年) 第2章 (特に65~73頁) などを参照。原典としては、R. Gilpin, *War and Change in World Politics*, Cambridge University Press, 1981 などがある。
- (10) エゴグラムの最新の研究成果である東京大学医学部心療内科 (1993) (前掲書) や東京大学医学部心療内科 (2006) (前掲書) における議論が念頭に置かれている。
- (11) 各段階は厳密に区別することは不可能であり、それゆえ前後の段階の状況が錯綜する局面が存在するため、「中継ぎ役」の要素を有する政治的リーダーの役割は重要である。
- (12) 従属変数 (被説明変数) の説明要因としての独立変数 (説明変数) 間の相乗効果が個々の変数の自律的な作用以上の影響を与えることを意味する統計学用語である。